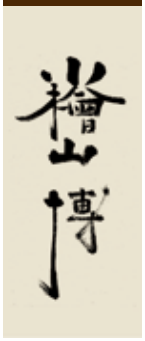
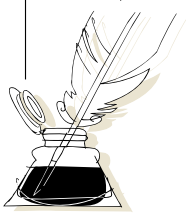
連載エッセイ 193
人生讃歌



地球が近くなる



年をとるにつれて、ますますうまい物を食べるのと酒が生き甲斐になってきているのは一種の退化だろうが、悲観はしていない。ただし食べ物や飲む酒をまずいと思うようでは心の張り合いと感じないから、問題は体の調子がいいかどうかである。これが面倒だ。年齢が頭になく、毎日うまい酒を熱望するがそうはいかず、体調がそこそこでも酒量は五十歳ごろの三分の一以下に落ちてしまったのである。予想をはるかに超えた事態だ。

★

物書きの宿命で、不眠や異常な肩こり、苛々や自律神経の疲れなどの精神的な不具合は仕方ないが、一年に一回は体の検査をする。特に頭の中が心配で調べてもらうが、頭蓋骨と脳の間に隙間ができているみたいなのは、おそらく脳味噌が減り続けての空洞だろう。自分でも物忘れ、勘違いなど脳のはたらきの心細さを感じるのだから仕方ない。

頭の具合いにくらべ、酒にかかわる臓器が比較的いいのは心強い。肝臓や心臓、筋肉の故障をあらわすというＡＳＴ（ＧＯＴ）は基準三〇のところ、ぼくは一五だから良いのだろう。肝臓障がい数字のＡＬＴ（ＧＰＴ）は基準三〇が十と、これもいい。肝臓・胆道の故障をあらわすというγ-ＧＴＰの基準五〇が十八だから、良好のはず。十五年前、ガンになりやすいと言われた膵臓の水たまりは、その後、大きくも小さくもならないというから何でもないのだろう。いまのところは。

★

つい先日、妻が「近ごろ地球がとても近くなった」と言った。そして視力が良くなったのかもしれないと喜んでいる。聞くと、いままで立っていて地面や床がぼやけていたのが、はっきり見えるようになったというのである。とくに床のゴミが良く見えると笑った。「それはよかった」とぼくも笑った。足元が鮮明に見えることと地球が近くなったことの関連はよくわからなかったが、とにかく八十近い妻の眼が良く見えだしたのは素晴らしい。そういえば僕も最近、足元の地面が以前よりはっきり見えるような気がしていた。しかし七十歳ころ一〇だった視力が十年以上たってさらに良くなったとは考えにくい。だが、そういうことがないとは限らない気もする。

ぼくは二十歳ころ二・〇と良かった視力が、東京にいた二十七歳で自動車の運転免許をとるとき、視力が低い、眼鏡使用と言われてびっくりした。北海道の山奥で育って健康だった体が、二十三歳からの東京暮らしで生活が乱れたためだ。毎晩のように深酒をし、毎日五時間しか眠らず、女性ともうまくいかず、ろくな物を食べないから栄養失調でガラガラに痩せた。視力も落ちたのだ。眼鏡を作り、運転しないときもかけるようになった。

ところが九年いた東京から札幌へ戻ると視力は回復したが、眼鏡はかけ続けた。なぜなら、生まれつき怯えたようにおどおどしている眼を隠せたし、何人かの女性から眼鏡が素敵と言われたからだ。女性にほめられたら放せない。そして八十七歳での運転免許更新でも眼鏡不要と言われた。老眼でも近視で

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

も遠視でもなく、眼鏡をかけず新聞も百メートル先の看板文字も、文庫本の文字もルビも見えるのだ。これにはびっくりしたが、ぼくとしては酒のおかげだと考えている。

★

妻は地球が近く見えると言って間もなく、いつもの定期健康診断を受けた。もらった検査通知書を見て妻が叫んだ。身長が八チンも縮んだというのである。二十歳ころより八チンも身長が低くなったというのだ。どうりで最近、台所の流し台が高くなったと思った、と言った。地球が近く見えるのも当然だ、とぼくは笑った。

挿絵／中江潤一

ともあれぼくも念のため背丈を測ってみると、なんと八チン縮んでいたのである。二十歳ころ百七十三センチあったのが、六十年後のいま百六十五チンになっていたのである。そういえば、すべてのズボンの裾が靴にかぶさって地面を引きずり、階段を登るとき昔より大股になってつらかったのだ。八チンの収縮は大きい。それにしても身長がこれほど大幅に縮むということは、背骨や腰骨が少し摩り減ったくらいではない気がするが、どういうことなのだろう。

★

いまさら未練がましく十八歳のときの体格を持ち出すのは見苦しいとは思うが、この際、回想したい。身長一七三チン、体重七十三キロ。首は馬のように太く、肩幅は牛のごとく張り、胸板厚く腕の筋肉は盛り上がり、太ももは二本の丸太のごとくであった。中学ではスキーのジャンプで優勝し、高校の校内対抗でスピードスケートの一万メートルを滑り、柔道初段の体だった。十三歳の夏の二ヵ月半は、中学校まで毎日、往復三十キロを歩いて通ったのだ。いまさら詮無い話だが、なつかしい。

そして老朽のいまである。風呂の鏡に映る我が姿は痩せさらばえ、見る影もない。それは中学校の理科室にあった人骨の全身模型の標本そのままである。実態はきびしいのである。聞くと成長ざかりの十三歳ころから背丈が一年に十センくらいミシミシ音をたてて伸びるそうだ。そして七十歳あたりからミシミシ縮んでゆくから人生うまくできている。だったら縮みながら快適に暮らしたいが、思い切りの悪いぼくには難題で、まずは酒を飲みながらゆっくり考えたい。

★

それではと、早めの晩酌にする。庭の木の葉のそよぐ音が澄んでいる。そうか、十月だ。あした中山峠へ秋を見に行こう。 Ⓙ

■小檜山　博（こひやまはく）：作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。